令和７年１月７日

研修だより 54 号

「非認知能力の必要性②」

小笠原康晃

前号の続きです。

先輩方が取り組んできた教育活動は、非認知能力の育成に大きな影響を与えていました。

授業と同じくらいに特別活動や課外活動に力を入れて子どもたちを指導してきた結果でした。

しかし、現在は、かつてのように特別活動や課外活動に力を入れることは大変難しい状況になっています。

そのため「授業の中で非認知能力をどのように伸ばしていくのか」ということが、求められています。

そもそも、なぜ非認知能力が人生に大きな影響を与えるのでしょうか。

このことが言われるようになった理由はなんでしょうか。

一番大きなきっかけは、「ペリーの就学前計画」の研究発表です。

1962 年から 1967 年にかけて、米国の貧困層の家庭を対象に行われた大規模な社会実験です（今では、人権の配慮上、同じ実験はできません）。

内容としては、幼児期に適切な幼児教育を行ったグループとそうでないグループに分け、追跡調査を行ったというものです。

結果して、幼児期に適切な幼児教育を行ったグループは、もう一つのグループよりも、就学率や就職率、持ち家率などが人生に影響を与えるものの割合がよかったというものです。

分析を進めると、幼児期に「計画性」や「忍耐性」など、非認知能力が大きな影響を与えていることが分かりました。

そこから、「非認知能力」という言葉が注目されるようになりました。